

莫
敦

煌

井上靖



敦とん
煌きやう

昭和三十五年三月二十日第十一刷発行

著者 井い上うへ靖やすし

發行者 野間省一

印刷者 盛英信

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町三ノ一九
電話大塚(94)大代表三二一一
振替東京三九三〇番

定價二百圓

落丁本・亂丁本はお取りかえいたしません

敦^{とん}

煌^{こう}

題
簽
藤
枝
晃

一 章

趙行徳が進士の試験を受けるために、郷里湖南の田舎から都開封へ上つて來たのは、仁宗の天聖四年（西紀一〇二六年）の春のことであつた。

時代は世を擧げて官吏萬能の時代であつた。武人の跋扈を防ぐために文官を重用する政府の方針は、太祖から始まつて太宗を経て仁宗に到るまで聊も變わつていなかった。軍部の要所要所へも文官出身の官吏が配されていた。學問を身につけて官吏になることが、身を立てる者の等しく選ぶ道であり、官吏任用試験に合格することが、出世への緒口であつたわけである。

仁宗の前の天子眞宗は、自ら「勸學詩」を作つて、學問によつて登第出身するのが富貴を得る捷徑であることを天下に知らしめた。——家を富ますには良田をかうの用なし 書中自ら千鐘の粟あり。居を安んずるには高堂を架すの用なし、書中自ら黄金の屋あり。門を出ずるに人隨うなきを恨むなかれ、書中馬有り、多きこと簇の如し。妻を娶るに良媒なきを恨むなかれ、書中女あ

り、顔玉の如し。男兒平生の志を遂げんと欲せば、六經を取りて窓に向かつて讀め。

進士試験に優秀な成績で合格しさえすれば、宰相を初めいかなる高官を望むとも不可能なことではなかつた。諸州の通判の如きもこの試験の合格者の中から拔擢されることが多かつた。眞宗の詩の語るように、黄金も美人もすべて書を読むことに依つて得ることができた。

趙行徳が都へ上つたこの年の試験に、各地から京師に集まつて來た者は實に三萬三千八百人の多きに達した。この中から五百人が選ばれることになつてゐた。趙行徳は春から初夏へかけて都に滞在し、西華門附近の同郷出身の知人の家に寄寓してゐた。都の三市六街は受験者たちで溢れてゐた。老いも若きもあつた。この間に趙行徳は禮部に於ける帖經、雜文、時務策五道、詩賦等の試験をいづれも優秀な成績で通過してゐた。

漸く暑くなろうとしてゐる初夏の陽射しが楡の葉越しに都大路に射し込んで來る或日、彼に吏部に於ける、身、言、書、判の試験を受けよという通達を受けた。身は體貌豐偉、言は言詞辯正、書は楷法適美、判は判文の文理優長なるを能しとした。これに合格すれば、あとは殿中に於いて天子の策問に應ずることが残されてゐるだけであつた。そして殿中の試験に於いて一位の成績を得たものは狀元、二位は榜眼、三位は探花と稱せられ、そうした優秀な成績の者は勿論のこと、總ての合格者がその輝かしい將來をここに約束されるわけであつた。

趙行徳は受験者の中に自分より優れた學力を身につけたものが何人もあろうとは思わなかつた。實際にまた彼はそう自負していいものを身につけていた。儒者の家に生まれ、幼時から學問に親しみ、三十二歳のこの年まで、書を身邊から離した日はないと言つてよかつた。これまでの何回かの試験は、いずれも行徳にとつては難しいものではなかつた。その度に何百何千の競争者が篩にかけられ、次々に脱落して行つたが、行徳としてはかりそめにも自分が試験を受けて、落伍者の群れにはいるなどということは考えられないことであつた。

その日趙行徳は試験場と指定されていた尙書省の中の建物の一つへ赴いた。廻廊が四周に廻らされた控えの中庭に受験者たちは集まつていた。

受験者たちは係官によつて一人一人呼び出され、長い廊下を傳わつて會場の方へと導かれて行つた。自分の番が廻つて来るまで、受験者たちは思い思いの姿勢で中庭の周縁部に配されてある椅子に腰をかけたたり、老いた槐樹が何本か植わつてゐる邊りを歩き廻つたりしてゐた。乾燥した空氣の中を風は絶えず渡つてゐた。趙行徳の番はなかなか廻つて來なかつた。彼は隅の大きな槐樹の根もとに腰をおろしたまま、落ち着きのない長い退屈な時間を過した。そのうちに行徳は、軽い睡魔に襲われて眼を閉じた。腕を組み、顔をやや仰向けにして樂な姿勢をとつた。時々新しい名が呼びあげられていたが、やがてその聲が次第に趙行徳の耳の中で遠くなつて行つた。

いつか趙行徳は睡りに落ちていた。そして彼は、夢の中で天子の前に引き出されていた。趙行徳の導かれた試験場には、兩側にずらりと高位高官の官服の人が居並び、その中央に一脚の椅子が置かれてあつた。行徳は臆せず中央の椅子に向かつて歩み、そこに腰をおろした。その時行徳は、自分の前一間程のところ有一段と高くなつていて、そこに薄い幕が垂れ下がっているのを見た。

「何亮の安邊策はいかに」

質問は幕の奥から發せられた。意外に太い聲であつた。何亮の安邊策というのは、今から三十年前の至道三年（西紀九九七年）に、靈州の屯田を査察した當時の永興軍の通判何亮が、時の天子眞宗に奉つた邊境問題の建議書であつた。政府が西夏族の西邊侵寇に最も手を焼いていた時期のことである。西夏の問題は更に遡つた太祖の晩年から建國間もない宋の大きな問題となり、何亮の視察した當時は、邊境事情の最も差し迫つた時期であつた。そしてその後この西夏問題は依然として解決されないまま今日に到つていた。

西夏というのはチベット系のタングート族のたてている小國で、この種族は早くから五涼地方の東方に蟠踞していた。五涼地方は所謂夷夏雜居の地で、タングート族以外に、回鶻、吐蕃を初めとする雜多な少數民族が群がついて、その幾つかは小さい王國をたてていたが、太祖の頃よ

り獨り西夏が強大となり、他種族を壓迫するばかりでなく、屢々中國の西邊に侵寇するようになっていた。西夏は表面は常に宋に臣屬する態度を見せていて、他方中國の年來の敵である契丹きょうたんからも封冊を受けており、その叛服常ならぬ態度は宋朝歴代の惱みの種であつた。五涼に接する靈武の地は殆ど毎年のように西夏の騎馬隊による蹂躪を受け、ために何亮の安邊策が奏上される前年には、朝廷では靈武放棄の説さえ行なわれたほどであつた。

何亮は、その安邊策に於いて、これまでの西夏對策のすべてを三つに分け、それらをきびしく批判檢討した上、容赦なく缺點を舉げて、いずれもこれを不可として返けていた。

何亮が批判した三つというのは靈武放棄、興師征討、姑息羈縻の三説である。靈武を放棄せんか西夏の地は廣くなり、西夏と西域諸民族の聯合の恐れを生じ、しかも五涼東方に産する馬を得られなくなる。興師征討は邊兵の不足、糧食の缺乏で實現はむずかしい。少數部隊を出勤させれば糧道を絶たれ、大軍を動かせば住民の困難思うべきものがある。それから姑息羈縻の策を執れば暫時の平和は望めるかも知れないが、豺狼の如き西夏は五涼に散らばつてゐる幾つかの少數民族を併呑、中國將來の大患となるであろうし、現に宋のそうした出方を待つてゐる西夏の思う壺にはまるといふものである。

そして最後に何亮は最も實情に即したのものとして己が意見を具申していた。西夏の西邊劫略の

際の前進基地となる水草地帯に一城を築き、西夏の大量の動くのを待つてこれを撃つことである。従来西夏との闘いに於いて勝利を収め得ないのは、いつも敵の主力との決戦ができず、果てしない沙漠の追撃戦に於いて、徒らに兵力を消耗するからである。若し敵の方から闘いを挑んで来るようなことがあれば、これを殲滅するのはさして難事ではない。西夏が軍を動かすことがない場合は、更に一城を築いて城を二つとなし、一つを城とし、一つを塞とする。一城の保存には巨額の費用を要するが、二城の場合は、その附近一帯に貧民を屯田せしめることができる。そして良將を選んで防備に當たらせ、徐々に恩信を以つて夷族を招撫すべきである。

「——時の爲政者が何亮の意見を用いず、何亮の否定した姑息羈縻の策をとつて、邊境問題を今日に及びかせていることは、甚だ愚かなことである。今日西邊に眼をやつてみると、遺憾ながらすべて何亮の豫言した通りになつてゐる」

趙行徳は何亮の安邊策を支持しながら、いつか自分の聲が昂奮に震えているのを感じた。行徳は自分の周囲で、椅子が倒れ、机が叩かれ、怒聲と罵聲が沸き起るのを知つた。併し、行徳は言いかけたことは最後まで言つてしまわねばならなかつた。そこで再び彼は口を開いた。

「現在西夏は四圍の戎夷を征服し、日々強大となり、まさに中國將來の大患とならうとしてゐる。宋はために、八十萬の大軍を常に準備しなければならず、それを賄う費用は巨額に上り、し

かも軍馬の産地は敵の手中にあつて、その補給さえ満足にできない状態である」

趙行徳は天子の居室の幕が荒々しく引き揚げられるのを見た。そして次の瞬間、多勢の男たちが自分に向かつて突進して来るのを見た。行徳は立ち上がろうとしたが、どういふものか足の自由は失われていた。行徳は前にのめつた。

その時趙行徳は夢から覺めた。彼は地面に前のめりになつて自分の發見し、急いで躰を起こして邊りを見廻した。行徳の眼に映つたものは、強烈な陽が照りつけている誰もいない中庭であり、その一隅で自分を見おろしている官服の一人の吏員の姿であつた。行徳は砂のついた掌を拂つて立ち上がった。先刻まであれほど多勢の受験者たちの居た中庭には、今は誰の姿も見えなかつた。

「試験は——」

行徳は呟くように聲に出して言つた。官服の人物は行徳を蔑むように睨みつけたまま一言の返事もしなかつた。行徳は不覺にも自分が睡りこけて、殿中に於ける天子の策間に應じている夢を見ている間に、大事な試験を自ら放棄した結果になつたことを知つた。恐らく自分の名前も呼び上げられたのであろうが、すっかり睡り込んでしまつていて知らなかつたのである。

趙行徳は出口の方へ歩いて行つた。尙書省の建物を出て、人通りの少ない靜かな官衙街を抜け

た。街衢から街衢へ、行徳は魂のない人間のように歩き續けた。殿中に於ける試験も、それに合格して高官の居竝ぶ宴席に列することも、白衣公卿、一品白衫と稱せられる榮光も、いまやすべ
ては一片の夢と化してしまつていた。

趙行徳の心にふいに孟郊の七絶が浮かんで來た。春風意を得て馬蹄疾く、一日見盡くす長安の花。これは孟郊が年齢五十にして進士試験の合格の報に接した時の感懐をうたつたものであつた。いまの趙行徳の周圍には長安の牡丹の花はなく、烈しい夏の陽が絶望に打ちひしがれた彼の身を包んでいるばかりである。厄介なことには進士試験は三年先でなければ行なわれないのであつた。行徳はただ歩きに歩いた。歩くといふことだけが彼を支えていた。そしていつか彼は城外の市場に足を踏み入れていた。夕闇が訪れようとしている狭い路地の中を、汚ない服装をした男女が群がり動いている。道の兩側は大部分が食物を賣る店であつた。鶏やあひるの肉を鍋で煮たり焼いたりしている店が立ち竝んでいる。油のこげつく匂いと汗と埃りとが入り混じつて、むせ返るような異臭があたりに立てこめている。羊や豚の炙肉を軒先に吊り下げている店もある。行徳はさすがに空腹を覺えた。朝から何も食べていなかつた。

幾つ目かの路地を曲がつた時、行徳は行手に人々が黒山のようにたかつてのを見た。細い路地はそれだけでなくさえ混雑を極めていたが、そこは全く通行止の状態になつていた。行徳は人

垣の背後からその囲みの中を覗いてみた。

行徳の眼に最初映つたものは、木箱の上に置かれた分厚い板の上に横たわつてゐる一人の女のむき出しにされた下半身であつた。行徳はなおも躰を人垣の中へ割り込ませた。人々の肩越しにこんどは女の上半身が覗かれた。女は糸纏わぬ全裸の姿で横たわつてゐるのであつた。一見して漢人でないことは明らかであつた。肌はそれほど白いというのではなかつたが、豊満な感じで、行徳がいままで眼にしたことのない艶を持つて居り、仰向けにされた顔は顴骨が出て、顎は細く、眼は幾分落ち窪んで暗かつた。

行徳はまた躰を前に割り込ませた。女の横たわつてゐるすぐ横に、一人の半裸體の男が大きな双物を手にして、見物人の方を睨みつけるようにして立つてゐる。男は見るからに獐猛な面構えをしてゐた。

「さ、どの部分でもいい、買つたり、買つたり」

男は見物人をねめ廻しながら言つた。その時だけ見物人は少しざわめいたが、彼等の眼は珍しい賣物から少しも動かされなかつた。

「どうしたんだ、みんな。意氣地のない奴らばかりだ。これを買おうというのはいないのか」

男は再び嘸鳴つたが、周圍からは一言も發せられなかつた。この時行徳は人垣の中から進み出

て言つた。

「いつたいこの女はどうしたんだ」

そう訊かすにはいられなかつた。すると刃物を持つた男はじろりと行徳の方へ眼を据えて、

「こいつは西夏の女だ。男を寝とつた上、相手の内儀さんを殺めようとした性悪女だ。肉を切り賣りしてやる。欲しければどこでも買え。耳でも、鼻でも、乳でも、股でも、どこでも賣つてやる。値段は豚の肉と同じだ」

と言つた。そう言う男もまた漢人ではなかつた。男の眼玉は青味を帯んでおり、胸毛が金色に光つている。肉附きのいい褐色の肩には何の符呪か判らぬ異形の彫物が施されてある。

「女は承知なのか」

行徳が訊くと、男が返事をする前に、思いがけず、そこに横たわつていた女が口を動かした。

「承知だ」

口調は荒つぽかつたが、それは高い透る聲だつた。女が口をきいたので、見物人の間には一瞬さわめきが起こつた。行徳には女が諦めているのか、不貞腐つているのか見當がつかなかつた。

「情けない奴らばかりだ。一體何時間こうしているんだ。買えねえのなら買えるようにしてやるぞ。指はどうだ、指は」

瞬間男が刃物を閃めかせたと思うと、刃物が板を打つ音が響いて、それと同時に女の唇から悲鳴とも呻き聲ともつかぬ叫びが洩れた。行徳は、女が自分の頭部へと廻っていた腕の一本が切られたのではないかと思つた。行徳の眼に鮮血の迸つたのが見えたからである。併し、腕が切られたのではなかつた。女の左手の指が二本、その先端の一部を失くしていた。

見物人はどよめいてその輪を擴げた。

「よし、買う」

趙行徳は思わず叫んだ。

「全部買う」

「買うか」

男は念を押した。するとその時、血を滴らせた手を板について女がむつくりと半身を起こして來た。そして彼女は行徳の方に血走つた顔を向けると、

「おあいにくだが、みんなは賣らないよ。西夏の女を見損つて貰つては困る。買うならばらにして買つて行け」

それだけ言つて、女はまた仰向けにひっくり返つた。行徳は女の言葉が何を意味しているかを知るのに多少の時間を要した。行徳は自分の態度が女から誤解されていることを知ると、

「いや、買うには買うが、お前をどうしようという氣も持つていない。この男から買ひ取つてやるから、お前はどこへなりと行くがよい」

そう女に言つて、それから男に女を買ひとる交渉をした。たいした金額ではなかつた。話はすぐ纏まつた。行徳は男の言うだけの金を懐中から出して、それを板の上に置くと、

「この女を自由にしてやれ」

と言つた。男は金を握むと、女に向かつて、何か譯の判らぬ言葉で盛んに喚き立て、嘔鳴りちらした。女はのろのろと躰を板の上に起こした。

趙行徳は意外な事の成行きに呆然と突つ立つて見物人の輪を抜け出すと、そこから離れ、路地の出口の方へ向かつた。半丁程歩いた時、行徳は背後から呼びとめられて振り返つた。女が走つて來た。粗末な胡服を身に纏つたその女は、ぼろ布で左の手首を包んでいた。女は近寄つて來ると、

「金をただ惠んで貰うのはいやだから、これでも持つて行つておくれ。私はこれ以外何も持つていないんだ」

と言ひながら、一枚の小さい布片を差し出した。出血のためか女の顔は蒼ざめていた。行徳が手渡された物を擴げてみると、それには異様な形の文字のようなのが十個ずつ三行に認められ